

## 「不思議の負け」の先に



株式会社野村資本研究所 研究理事  
吉岡伸泰

昭和100年目(昭和改元99周年の年)に当たる2025年、昭和を偲ぶ様々な催しが開催される中で、プロ野球界を代表する一人だった長嶋茂雄氏の逝去が報じられた。長嶋氏がひとときわ鮮やかな印象を残した現役時代は、日本の勢いが盛んだった昭和の高度成長期に重なる。名目GNPで日本が西ドイツを抜き第2位となった1968年は、長嶋選手の全盛期だった。

世界第2位の経済大国の席は約40年の間日本の定位置だったが、2010年に中国がその席につき、2023年にドイツ、今年はインドに抜かれて世界5位の席に後退する見通しのようなのである。名目GDPの順位だけで国力の充実度を量れるとは思わないが、経済大国と称えられた時代と比べれば国際社会における存在感が低下したのは否めない。そうした流れの中での訃報だった。

天邪鬼な性格の故か、お別れの会の映像等をみていて頭をよぎったのは、平成の終焉直後(2020年2月)に逝去された野村克也氏の言葉だった。両氏とも選手・監督時代を通じて偉大な記録を残されたのは共通しているが、「向日葵と月見草」「コンピューター野球とID野球」等々、世評は対照的だったと思う。野村監督の活躍が一番印象的だったのはヤクルト時代(1990～98年)だったが、こちらはバブル崩壊、大震災等